久留米入城400年 ARIMA

久留米は全国屈指の城下町だった!!
21万石を誇った11人の藩主たちとは？

久留米城と有馬のお殿さま

市役所横が久留米城!?
久留米藩を治めた有馬家とは？
久留米城と11人のお殿さまの
モノ語りにせまります！

福岡県南の中核市として発展を続ける久留米市。江戸時代は21万石という全国で20番目の石高（こくだか）を誇る城下町でした。その拠点となったのは久留米城。篠山城とも呼ばれ、現在は石垣と堀跡が残り当時を偲ぶことができます。しかし、江戸時代の久留米城は、私たちの想像をはるかに超える巨大なものでした。

失われた久留米城と、久留米を治めた歴代の藩主たちの姿とは、どのようなものだったのでしょうか？

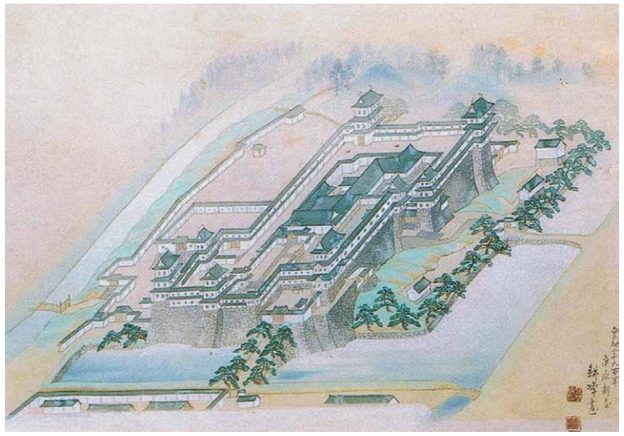
久留米城本丸全景
筑後川左岸の小高い丘の上に築かれている

❶ 久留米城

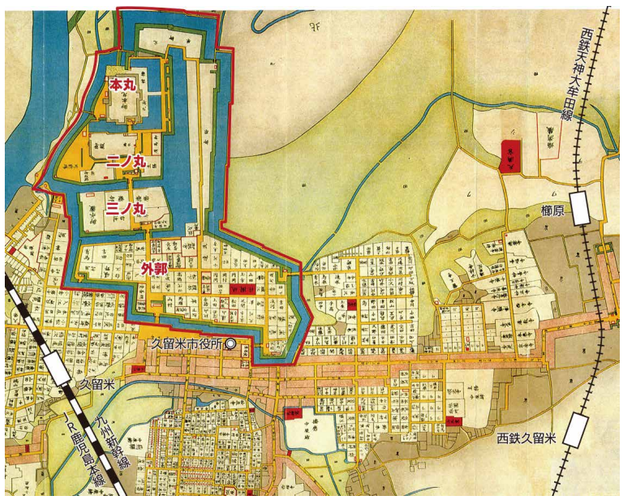
江戸時代、筑後地域北半部は21万石を誇った久留米藩領でした。治めた藩主は有馬家。兵庫県出身の大名で、豊臣秀吉や徳川家康に仕えました。今から４００年前の１６２１年、丹波福知山（たんばふくちやま）（京都府福知山市）の藩主だった有馬豊氏は、幕府から久留米への移封（いほう）を命じられました。その後、明治維新を迎えるまで、有馬家は久留米藩を治め、現代に続く足跡を数多く残しています。

久留米城は、16世紀には原型となる砦（とりで）が築かれていたと伝わりますが、戦国末期～江戸初期の小早川・田中家の時代に整備されたと言われます。その後、有馬家の入城に伴い、約70年と言う歳月をかけ、巨大な城と城下町が完成しました。

堀（ほり）や筑後川で防御された本丸は、約15ｍの高さを誇る石垣と7棟の櫓（やぐら）を結ぶ多門櫓（たもんやぐら）で囲まれ、中央には藩主が政務を行う御殿がありました。本丸の南へ二ノ丸、三ノ丸、そしてこれらを東から南へかけて囲む外郭が広がります。それぞれ堀や土塁（どるい）によって防御され、城内には藩主や上級家臣の屋敷、藩役所等が広がっていました。戦後の復興で、その面影はほぼ残っていませんが、現在の地図と重ね合わせると、その大きさが分かります。



近代の画家・天野耕峰（あまのこうほう）が描いた久留米城本丸の画



久留米城と現在の地図を重ねたもの。
久留米市役所北側まで広がっており、南北 1.7 ㎞、東西 1.2 ㎞と巨大な城だった

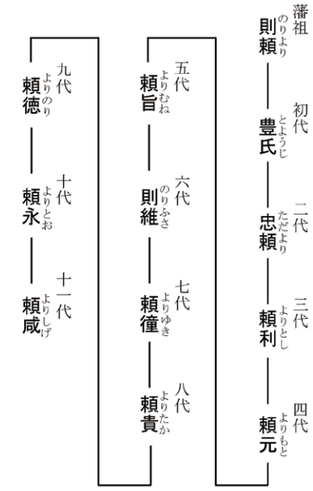
明治時代の久留米城

❷ 久留米藩主・有馬家

久留米藩主有馬家は、室町幕府の要職を務めた赤松家の一族で、兵庫県の有馬温泉付近が発祥と言われています。有馬則頼の時に織田信長家臣の羽柴秀吉に仕え、関ヶ原の戦いでは東軍として徳川方で活躍しました。その功績から、子の豊氏とともに大名となりましたが、茶人としても一流であったと言われます。

豊氏は徳川家康の養女・連姫と結婚し、大坂の陣でも功をあげるなど、徳川家から信頼を勝ち取っていきます。そして、前領主の田中家の改易に伴い、久留米へ加増・転封となりました。当時としては大出世と言えるでしょう。

久留米初代藩主・有馬豊氏
茶道を好み、利休十哲にも上げられる



歴代藩主の系図

有馬家が久留米へ転封となった時代、江戸幕府の支配はいまだ盤石とは言えませんでした。特に江戸から遠く離れた九州には、筑前の黒田家や肥前の鍋島家、薩摩の島津家など、豊臣系の外様大名が多く、江戸幕府にとっては不安が拭えませんでした。そこで九州の大名達を監視するために送り込まれたのが有馬家だったのかもしれません。豊氏が連姫と結婚したことにより、有馬家は徳川家と親族になったと言えます。有馬家にとって、縁のない久留米に転封となったのは、江戸幕府が九州を安定させるために講じた政策の一環だったのかもしれません。

久留米藩主を祀る篠山神社
明治 12 年（1879 年）に本丸跡に建立された

豊氏以降、有馬家は明治維新を迎えるまで、11代にわたり藩主として久留米藩を治めました。病気などで短命に終わった藩主もいましたが、歴代の藩主たちは、まちづくりや治水、寺社への寄進、産業振興など、現代の久留米に続く、多くの事績を残しました。次に歴代藩主と現代の久留米の関係を見ていきたいと思います。

❸ 歴代の藩主と久留米

有馬家による久留米のまちづくりは、１６２１年の**初代豊氏**の入封直後から始まりました。田中時代までの久留米城は、東が正面でしたが、南へ改め、連郭式の巨大な城郭へと造り変えました。周囲には侍屋敷や町人が住む城下町、寺町などを配置し、町筋を整備しました。この時の町割りが、現在の久留米市街地の原型となっています。城下町の整備は**2代忠頼**にも引き継がれます。忠頼は城下町から周囲へ延びる街道を整備し、田主丸町や北野町など在郷町の振興に注力しました。また、水天宮や日吉神社、北野天満宮へは社殿を寄進しています。**3代頼利**と**4代頼元**は、農業振興や治水事業に取組みました。大石長野水道や恵利水道を開削し、現在も流域の耕地を潤しています。筑後川には流れを調整する荒籠を造り、治水にも尽力しました。

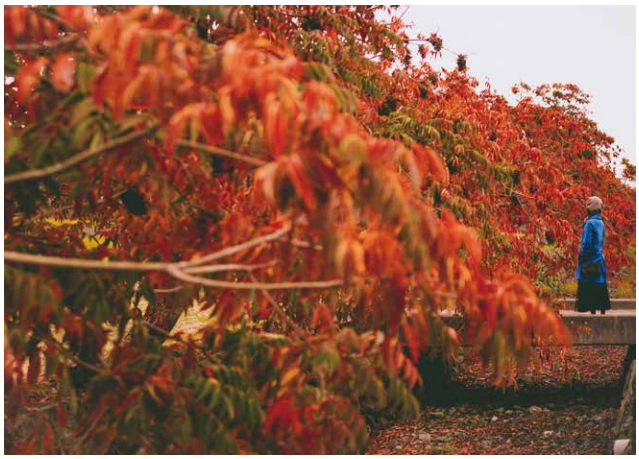
高良大社の一の鳥居（重要文化財）
承応３年（1654 年）、２代忠頼が寄進した

荒籠と筑後川

恵利堰

6代則維の時代にも床島用水や小森野荒籠が整備され、農業の振興と治水は、その後の藩主達にも引き継がれていきます。則維は、藩の財政を立て直すために藩政を改革し、収入源として朝妻焼（あさづまやき）を創業したことでも知られます。**7代頼僅**は54年という長期間の治世中に、寺社への寄進や

朝妻焼



柳坂曽根の櫨並木

櫨（はぜ）の栽培を奨励するなど、産業振興に尽力しました。関流和算（せきりゅうわさん）家としても知られ、学者としての一面もありました。**8代頼貴**は藩士の育成に力を注ぎ、明善堂（現在の県立明善高等学校）を創設しました。また、この時期に通外町に生まれた井上伝が久留米絣を考案し、その後の久留米の産業振興に大きく貢献していきます。**9代頼徳**は、歴代藩主の中で最も風流を好んだ藩主として知られています。茶道では表千家不白流（ふはくりゅう）に師事したことから、現在でも久留米は茶道が盛んな地域となっています。**10代頼永**は、藩の財政を立て直すために尽力し名君と呼ばれました。しかし、病気のため短命で亡くなっています。そして、**11代頼咸**の時に明治維新を迎えました。

約２５０年間、久留米藩を治めた11人の藩主たち。その足跡が、私たちのまわりのあちこちに、現在も残されています。

令和２年11月１日

◆発行／久留米市教育委員会

◆問合せ／久留米市市民文化部文化財保護課
TEL：0942（30）9322
FAX：0942（30）9714
E-mail：bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp